

坂井妙子（日本女大）

目的： ヴィクトリア朝後期(19世紀後半)には、白いドレスとベールは花嫁を表すシンボルとして、上流階級はもとより中産階級の間にも定着したが、人口の大部分を占める労働者階級はこのシンボルをどのように受けとめていただろうか。このことを解明するために、次の事項について検討した。

方法： 現存する労働者階級の花嫁衣装、労働者階級の人々によって書かれた自叙伝等を観察し、彼らがどのようなドレスを着たか検討する。労働者階級の経済状態、生活態度、サブクラス意識を検討し、さらに中産階級と比較することで、労働者階級の花嫁が白いドレスとベールに対して持っていたイメージを探る。

結果： 現存する労働者階級の花嫁衣装はすべて色ものである。労働者階級は独自の価値観と生活態度を持っているため、白いドレスやベールを花嫁の象徴とは意識していない。むしろ、けばけばしい、放らつといったネガティブなイメージが強い。以上のことから、労働者階級は独自の花嫁衣装観を持つことが推測される。